注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
緋色の軌跡

【作者名】
断頭台

【あらすじ】
七耀暦１２０４年。

最強の猟兵団の一角に所属していたある少年は数奇な運命の導きの元、トールズ士官学院に入学することに。

猟兵だった頃に比べ色々と制約に縛られることが多く、不自由をしながらも同じ仲間《Ⅶ組》のメンバーたちと帝国の問題へと立ち向かうことになる。

※別のサイトですが、同じタイトルの軌跡二次があるそうなので、再び変更します。読んでくださっている方々にはご迷惑をお掛けすること申し訳ないです。タイトル及びあらすじ変更しました。元《紅の軌跡》です。読みは『ひしょくのきせき』でお願いします。

act01

3月31日　トリスタ駅

ライノの花が舞う街の中緑や白の制服を着た少年少女たちが行き来するのがよく見える。彼らが着ているのはここ、トリスタにあるかの有名なドライケルス大帝が創設したとされている軍学校『トールズ士官学院』の制服である。白色は貴族、緑色は平民と制服の色で区別されているのだ。

そんな中、一つの異色の色…『赤色』の制服を纏った生徒たちが数名見受けれる。作りはトールズ士官学院と同じものであることから、士官学院の生徒なのだろうが、如何せん誰も赤色の制服があるなんて聞いたことがなかった。勿論、この街に住んでいる人々も今日以外に今まで見たことが無いようで、好奇の視線で赤の制服を纏った少年少女を見ている。

そして、同じく異色の赤の制服を纏った藍色の髪の少年――――『クリア＝ヴィルヘイム』も好奇の視線にさらされていた。

「……なんか異様に見られてんなー。別に気にはならないけど」

街の人々や他の平民や貴族の生徒が送る好奇の視線を気にした様子もなく、トールズ士官学院がある方へと歩いているのだが、彼が目立っているのはその異色の赤色の制服だけ、と言う訳ではない。

彼が肩にかけて背負っている物々しいトランクも彼を目立たせている要因の一つだろう。身の丈の半分くらい位の大きさもある。そして何よりも目を引くのは赤い蠍のステッカーが貼ってあることだろう。

そんなトランクを持っているわけだから周りの赤色の制服を着ている生徒よりも目立っているわけだ。……本人はほとんど気にしていないが。

「だるくなってきたサボるか？…『とう。』ぐほぉ!?　」

トールズ士官学院に近づくにつれてそんなことを考えていると背後から気の抜けた声が聞こえたかと思うとクリアの背中に物凄い衝撃が走った。

「……フィー、てめぇ」

「や。」

ピクピクとこめかみを引きつらせながら後ろを見ると全く悪びれた様子もないクリアと同じく赤色のトールズ士官学院の制服を着た白髪の小柄な少女がいた。

彼女の名前は『フィー＝クラウゼル』。クリアとは此処、士官学院に来る前に何度か会っており、一時期は、『ある人物』とともに行動したこともある。その『ある人物』とはクリアとフィーがこの士官学院に来ることになったきっかけを作った人でもある…らしい。

「背中に突撃したことはまぁ、百歩譲って許してやる。……けどな」

「？　なに？　」

「なんで背中に乗ってんだよ！　重いだろうが!!　」

「疲れた。連れてって」

「俺はてめぇの乗り物か!?　」

背中に飛び乗ってさっさと行くように催促してくるフィーに最初はこめかみに青筋を浮かべて苛立っているようだったが、諦めたのか深いため息を吐くと両手を後ろに回してフィーの体を支えるようにし所謂おんぶの状態でフィーとともに学園に行くのだった。

◆

「――――最後に君達に一つの言葉を贈らせてもらおう。本学院が設立されたのはおよそ２２０年前のことである。創立者はかの〝ドライケルス大帝〟――――〝獅子戦役〟を終結させたエレボニア帝国、中興の祖である。――――即位から３０年あまり。晩年の大帝は、帝都から程近いこの地に兵学や砲術を教える士官学院を開いた。近年、軍の機甲化と共に本学院の役割も大きく変わっており、軍以外の道に進む者も多くなったが……それでも、大帝が遺した〝ある言葉〟は今でも学院の理念として息づいておる。」

トールズ士官学院の講堂で学院長――――ヴァンダイクが壇上から生徒たちに語りかけるように話し出す。不思議と生徒たちがヴァンダイクの話を真摯に聞いている。「『若者よ――――世（よ）の礎（いしずえ）たれ。』〝世〟という言葉をどう捉えるのか。何をもって〝礎〟たる資格を持つのか。これから2年間で自分なりに考え、切磋琢磨する手がかりにして欲しい。――――ワシの方からは以上である。」

ヴァンダイクのその言葉で入学式は締めくくられ、各生徒たちは入

学案内状に書かれた振り与えられたクラスのある教室へと向かっていく中、赤色の制服を着たクリアを含む生徒たちは戸惑っていた。

何故なら彼らの入学案内状にはあてがわれるクラスが書かれていなかったからだ。生徒たちも不審に思っているのか周りの生徒に聞いているそんな中、クリアはというと……

「……ぐぅ」

寝ていた。

「え、えーっと……起こさなくていいのかな？　」

「別にいいと思う」

「に、入学式で居眠りなんて常識知らずだな」

戸惑ったように茶色の髪の少年が起こさなくていいか聞くが、クリアの隣に座っているフィーが即答で起こさなくていいと告げる。メガネをかけた緑髪の少年に至っては呆れている。……が、本人は眠っているためいざ知らずの状態である。

「はいはーい！　赤い制服の子たちはちゅうもーく！　って、既に赤色の制服の生徒たちだけみたいだけど」

赤い髪のとても教官とは思えなような服装をした女性がそう言って未だ講堂に残っている生徒たちの視線を集める。……クリアは寝たままだが。

「どうやらクラスがわからなくなって戸惑ってるみたいね。実は、ちょっと事情があってね。――――君達にはこれから『特別オリエン

テーリング』に参加してもらいます。……って、アンタは何時まで寝てるつもりよ」

「だっ!?　」

寝ているクリアの頭を叩く女性教官。眠りが浅かった為か軽めの叩きで起きたクリア。周りの生徒たちは苦笑をしていたが、フィーだけは呆れたような表情をしていた。

「ったく、入学式で居眠りなんていいご身分ねクリア」

「やー、ちょうどいい気温だったからつい…」

「……はぁ。まぁ、いいわ。で特別オリエンテーリングの場所なんだけど少し歩くから付いてきなさい」

ナハハと頭を掻きながら苦笑するクリアにため息をついて呆れる女性教官だが、気を取り直して生徒たちを先導するように講堂の外に向かって歩き出す。

戸惑いながらではあるが、おずおずとついて行く生徒たち。その中で黒髪の少年と茶髪の少年は突っ立ったままだった。それに気づいたクリアは彼らの方に向かって近づいていき、

「よぅ、俺らも行こうぜ。さっさと行かねーと置いてかれんぜ」

「あ、ああ。行こうエリオット」

「う、うん……えっと、君の名前は？　」

エリオットと呼ばれた茶髪の少年にそう問われて気づいたかのよ

うに頬を掻いて苦笑をする。

「あー……言ってなかったな。クリア＝ヴィルヘルム。クリアでいいぜ。宜しくなお二方」

「うん、よろしく。僕はエリオット＝クレイグ」

「俺はリィン＝シュヴァルツァーだ。よろしくなクリア」

互いに自己紹介をし終わったところで三人を残して既に女性教官と他の生徒達は講堂を出ており、クリアたち三人も慌てて後を追うことになるのだった。

◆

「んじゃ、改めて自己紹介からするわね。サラ＝バレスタイン……貴方たち《Ⅶ組》の担任を勤めされてもらうわ」

全員が案内された旧校舎につくと、女性教官―――サラ＝バレスタインはそう言いながら自己紹介をする…が、彼らはそれどころではなかった。なにせ自分たちが聞いたこともないクラスにあてがわれていたのだから。

「な、Ⅶ組？」

「教官、確かトールズ士官学院にはⅤクラスまでしかないはずでは……」

「あら、流石主席入学。よく調べているじゃない。そのとおり、全5クラスがあって平民と貴族で区別されていたわ……あくまで去年まで、だけど」

メガネをかけた三つ編みの少女の問いかけに半ば感心しながら答える。緑髪の少年は彼女が主席入学だということに驚いており、他の《Ⅶ組》のメンバーも一目おいているようだった。

「…去年まで、と言うのはどういうことですか？　」

「今年から新しくひとつのクラスが立ち上げられたのよねー…それが、すなわち君たち――――身分に関係なく選ばれた特科クラス《Ⅶ組》よ」

「特科クラスⅦ組……」

「あの、教官本当に…身分に関係なく？　」

自分たちがそんなクラスに割り当てられていたとは知らず殆どの生徒が驚いている。クリアも予想がついていていなかったからか少し驚いているが、フィーに至っては興味がないのかあくびをしている。そんな中

「じ、冗談じゃない!!　身分に関係ない!?　そんな話聞いていませんよ！　」

緑髪の少年が大声でそう叫ぶ。何事かと思い全員がそちらの方を向くと緑髪の少年は憤怒の表情を浮かべている。

「えーっと、たしか君は……」

「マキアス＝レーグニッツです　それよりもサラ教官！　自分は納得しかねます！　まさか、貴族風情と一緒のクラスでやっていけって言うんですか!?　」

「そうは言ってもねぇ…同じ若者同士なんだからすぐ仲良くなれるでしょ？　」

「そ、そんなわけあるはずないでしょう！　貴族風情と同じクラスなど…ゴメンだ！　」

苦笑しながらなだめようとするサラだが、それも意味をなさずさらに緑髪の少年――――マキアス＝レーグニッツはさらに怒りを増した様子で強く言う。

「……フン」

「何がおかしい」

「別に。……ただ、《平民風情》がよく吠えると思っただけだ」

「何？　」

金髪の少年の言い方が気に障ったのか、マキアスはさらに表情を険しくする。しかし、それを介した様子もなく金髪の少年はマキアスを見ている。

「…ちょっと、あんたたち」

「これはこれは、どうやら大貴族のご子息殿が紛れ込んでいたようだな。その尊大な態度……さぞ名のある家柄と見受けるが？」

「フン……ユーシス＝アルバレア。まぁ、別に《貴族風情》の名前など覚えてもらわなくともいいが」

「！　アルバレア……《四大名門》の一つじゃないか！　」

「東のクロイツェルン州を治めている《アルバレア公爵家》の…」

四大名門を知っている生徒たちは驚いた様子を隠すこともなく唖然としている。……クリアとフィーそれと、長身の男子生徒は頭の上に?を浮かべているが。

「大貴族中の大貴族ね……」

「噂は聞いたことがある……」

「だ、だからどうした！　そんな大層な家名に退くと思ったら大間違いだぞ！　僕は絶対にッ」

「はい、そこまで！　……全く、話が進まないったらありゃしないじゃない」

パンパンと手を叩き、注目を集めるサラ。マキアスとユーシスは不服そうにしているが、確かにサラの言うことにも一理あるためか反抗はしない。

「ま、少し、トラブルがあって遅くなったけど今からオリエンテーリングはじめるわねー」

「あの、教官……その、オリエンテーリングと言うのは」

「そう言う野外競技があるというのは聞いたことがあるんですけど……」

どんなものかわからない事に困惑を隠せない生徒たちはその目に少し不安を宿している。……若干名を除き、ではあるのだが。そんな中、心当たりがあったのか黒髪の少年———リィン＝シュヴァルツァーは

「……もしかして、門のところで預けたものと何か関係が？」

「あら、いいカンしてるわね。正解よ♪」

「あー……そういや預けたなぁ」

「イヤイヤ、忘れていたの!?」

クリアの忘れていた発言に驚くエリオット。しかし、そんなことを他所にサラはⅦ組の面々から距離を取りそして……

「それじゃ、早速はじめるわね～……ま、健闘を祈っておくわ」

ガコンッ

「！」

そんな音を立ててクリアたちⅦ組の足元が大きく傾いたかと思うと、暗闇に誘い込まれるかのように滑り落ちていく他のⅦ組の面々。

クリアのとなりのリィンも最初は必死に食い下がっていたが、知り合いなのか金髪の少女が落ちていくのを見ると自らも暗闇の中へと飛び込んでいった。

そんな中、クリアは元々、履いているブーツにに仕込んでいたナイフを床の隙間に突き立てて落ちるのを食い止める。因みにフィーはワイヤーを天井の鉄柱に巻きつけて落ちるのを逃れていた。

「こらこら、あんたたち。落ちてかないとオリエンテーションにならないでしょうが」

「や、だって結構高さあるだろ？　痛いのはゴメンなんだよ」

「……めんどい」

「あのねぇ……」

素直に下に落ちようとしない二人に表情をヒクヒクと引きつらせて言うサラ。……これは良くないと思ったのか、クリアはため息を吐いて

「分かったよ。……はぁ」

「仕方ない」

「あんたたちが一番ままならないわねぇ。ま、大丈夫だと思うけど気をつけなさいよー」

その言葉を聞いたのを最後にクリアはフィーを伴って他の《Ⅶ組》のメンバーたちが落ちていった暗闇の中へと飛び込んでいくのだった。

act02

「っと　」

Ⅶ組のメンバー達を追うように旧校舎の地下に飛び降りたクリアとフィーは到着したと同時にある光景を見て絶句した。

と言うのも、クリアたちが見たのは、知り合いと思われる金髪の少女を助けるように飛び降りていったリィンが彼女の下敷きになっていた。……それだけならばまだいいのだが、問題は彼の顔がある位置である。リィンの顔は金髪の少女の発育の良い胸に埋まっていたのだから。

「あいたた……」

「……あの、そろそろどいてもらえると助かるんだが」

「……ッ!?　」

申し訳なさそうに金髪の少女の下から声を出すリィン。最初は驚いていた少女も次第に自分が置かれている状況がわかって慌てて退こうとしたのだが…彼、リィンの顔が自分の胸に埋まっているのを理解すると茹で上がったように顔を真っ赤にして彼から退き、そして

パシンッ！

「うわっ」

「ヒュー、結構いたそうだな」

リィンの頬に思いっきり平手打ちをかましたのだった。その音の痛々しさにクリアの横にいたエリオットはびくりと一瞬目をつぶり、クリアは口笛を吹いて面白そうにしていた。叩かれた当の本人は呆然としているが。

「あ、あはは。災難だったね…リィン」

「ああ、今日は厄日だ…」

そう言って平手打ちをした少女の法を見るのだが、キッと睨まれたあとふいと顔をそらされた。まぁ、今日知り合った人にそんなことをされてしまえば、誰だって悄気げる訳で、リィンも例に外れることなく肩を落として意気消沈していたのだが、そんな中クリアはナハハと陽気に笑いながら

「何言ってんだよ、どう考えたって役得じゃねーか。同年代のしかも女子の胸に顔を埋めるなんてことそうそうできないぜ？　」

「いやいや⁉　確かにそうかもしれないけど！」

「…駄目だ、俺はそんな風に考えることができない……はぁ　」

更に肩を落として深い溜め息を吐くリィン。それを必死になだめるエリオットを見てクリアはどっちも苦労人になるんだろうなと割とどうでも良いことを考えていた。それから暫くしない内にクリアたちの制服の中から通信器の着信音が鳴り響いた。その着信音は、入学案内書と今クリアたちが来ている制服とともに送られてきた戦術オーブメントと思われるものから出ていた。

『どうやらみんな無事にいるみたいねー。それじゃあ、さくっと説明

するからサクッとクリアして来てちょうだいね』

「さくっとって……」

『と言っても、ただこの先の通路をひたすら進んでいたらアンタたちが落ちた上の階に上がれるようになっているからそこ目指して進んでもらうっていうだけだけどね』

「しかし、サラ教官……感じる限り此処には…」

『あら、気配察知に優れているわねー…そ、君が思っているようにその先には魔獣が潜んでいるわ』

魔獣と聞いてエリオットを含むごく少数のメンバーは瞳に不安の色を宿し、ゴクリとつばを飲み込んでいた。サラはソレを見ていたかのように苦笑しながら

『ああ、でも大丈夫よ。アンタたち程度の実力があったら別に問題なし。ソレに素敵なプレゼントもあるしね』

「プレゼント？　」

『ま、それは見てのお楽しみってことで』

サラがそう言った瞬間、今まで薄暗かった広間に光が灯って周りが見やすくなった。クリアたちは辺りを見回すと、端にクリアたちが学院の校門で預けた『荷物』と小さい箱が置いてあった。恐らく、サラの言う『プレゼント』と言うのは小さい箱のことだろう。

『校門で預けた荷物と今アンタたちが手に持っているであろう《ＡＲＣＵＳ》にはめる事で導力魔法が使えるようになるマスタークォーツ

をプレゼントしておいたから、ちゃっちゃとはめて戻ってきなさいよ～』

「あ、あの！　教官！もしかしてこの…」

『ＡＲＣＳね。財団とラインフォルト社が合同で開発した次世代の戦術オーブメント機…導力魔法が使えるようになるだけじゃないんだけど、その他の機能はまぁ…追々ね』

リィンに平手打ちをした金髪の少女が少し表情を強ばらせながらサラに問う。サラがそう答えると、金髪の少女は小さな声で『やっぱり…』と呟いたが、周りには聞こえていなかったようで彼女の一言に反応するものは誰もいなかった。

『ま、そういうわけだからさっさと登ってきて頂戴。このオリエンテーリングが終わったら文句でもなんでも聞いてあげるわ。……なんなら、ほっぺにチューでもいいわよ♪』

「マジで⁉　」

「アンタはダメよ　」

「そんな馬鹿な……」

ほっぺにチューの件で嬉々としてクリアはそう言うが、平淡な声でダメ出しをされてガクリと肩を落として見るからにショックですというふうな雰囲気を出すクリアに周りのメンツは多くが苦笑していた。……残りのごく少数は呆れるか、ジト目で彼を睨んでいるかのどちらかであったが。

◆

『よし、みんな《ＡＲＣＵＳ》にクォーツをセットしたわね？　んじゃ、今から特科クラス《Ⅶ組》のオリエンテーリングを開始するわ　気長に待ってるから頑張って頂戴』

各自が自分の荷物が置いてあるところに向かい、《ＡＲＣＵＳ》に箱に入っていたクォーツをセットし、準備を整えた所でサラからの通信は切れた。

が、少し、不安があるのか中々奥の通路の方へと誰も進み出さない。……クリアはまだ、さっきのサラの発言にダメ発言のダメージが響いていてそれでどころで、暗いオーラを身に纏って落ち込んでいる。……どれだけショックだったのかは語るべくも無いようだ。

「ふん……くだらん。こんな茶番はそうそうに終わらせるに限る」

「ま、待て！　一人で行くつもりなのか!?　」

「何だ、それがどうかしたのか？　」

「魔獣が出るんだぞ！　もう少し慎重に……」

ユーシスが一人で奥に行こうとするのをマキアスが止める。しかし、それを気にしたふうもなく、少しめんどくさそうにユーシスは

「だからなんだ。魔獣如き街の外に出ればいくらでもいるだろう。そんなものに怯える必要など俺にはない。……まぁ、平民風情であろう

と怖くて進めないというのならば、俺が守りながら連れて行ってやってもいいが？　《貴族の義務ノブレス・オブリージュ》…力なき民を守るのも貴族の勤めだ」

「はぁー、格好良いねぇ……んじゃ、力なき民の俺は守ってもらおうかねぇ……でっ⁉　」

「ふざけていないで、さっさと行く準備しなよ」

「なんだと……その見下したもの言い……どこまで言っても気に食わないな君はッ！　君に守ってもらう必要などない！　旧態依然とした貴族に負けるものか！　」

ユーシスの物言いに激昂したマキアスは一人奥の方へと進んでいく。サラのダメ発言から立ち直ったクリアはなんのプライドもなくユーシスに守ってもらう発言をしたのだが、即時フィーによって思いっきり脛を蹴られる。

「フン……阿呆め」

とマキアスの背中を見ながら呟き、彼の後を追うようにユーシスも奥の方へと進んでいった。その直後に青い髪の少女が顎に手を当てながら

「ふむ…そなたら、私と共に行動しないか？　」

「私たち？　」

「ああ、一人で行動するよりも、そちらの方が良いだろう。そなたも一緒……」

青髪の少女がフィーに言いかけたが、フィーはそれをワザと無視して一人奥の方へと進んでいく。…その様子に三つ編みの少女と金髪の少女は苦笑していた。

「ふむ、まぁ後に合流すればよいだろう。行くとしようか」

「そうね」

「はい、足でまといにならないように気をつけますね」

そう話しながら少女たちも奥の通路の方へと向かって進んでいく。その際、リィンと金髪の少女がすれ違う時に彼女はリィンを睨んだあと、ワザと鼻を鳴らして彼の横を通り過ぎる。そんな行動を取られてしまえば、人の良いリィンはしょげてしまうわけで、案の定肩を落としていた。クリアは女の子がするような行動ではないよな、なんてことを考えていてあまりリィンの方に思考はいっていなかったが。

で、残ったのがクリアを含めて四人。クリアにリィン、エリオット、そして長身の少年である。

「えーっと、僕らも行こっか？　」

「そうだな。……君も一緒に行かないか？　」

「俺か？　」

「ああ、リィン＝シュヴァルツァーだ。よろしく」

きょとんとしている少年にリィンは自己紹介をする。それに続くようにクリア、エリオットと続いた。すると、長身の少年も微笑みながら

「ガイウス＝ウォーゼルだ。よろしくしてくれると助かる」
「おう、よろしくなーガイウス」
「うん、よろしくねガイウス」
　互いに握手をしたあと、連携をとるために自分の武器を紹介しようということになった。各々トランクや包みを開けて武器を取り出す。
「まずは俺からだな」
「……十字の槍？　」
「ああ、故郷にいた時から使っていたものでな。足でまといにはならないだろう」
「なんつーか、様になってんなぁ」
「ふふ、そう言ってもらえると嬉しいな」
　照れくさそうに微笑むガイウス。危うげもなくソレを扱うところを見ると相当な使い手でもあるだろうなと考えながらクリアは笑っている。
「じゃ、次は僕だね。これ、なんだけど……」
「…見たことも無いものだな帝国の最新の武器か？　」
「俺も見たことないな…」

「必修の武術で使用するもので、あったんだけど…魔導杖らしいよ？
まだ、うまく扱えるかわからないけど」

まぁ、頑張って見るよと言って苦笑している。クリアも魔導杖の存在は知らなかったし、どんなものかもわからないので内心どんな戦い方をしてくれるのか興味を持っていた。…自分が使うとなれば話は別だが。

「んじゃ、まぁ俺かね」

そう言いながらクリアは蠍のステッカーがついたトランクから武器を取り出す。が、その誰もがクリアの武器を見て驚いていった。まぁ、見た目がそこそこ厳ついのでそれは仕方がないことだろうとクリアは一人結論づける。

「それはまた、凄いな……」

「そうか？　まぁ…見慣れてっからそう感じるだけか」

「銃剣、になるのかなソレ？　」

「ま、そだな。俺らはブレードライフルって言ってたけど、一応んな感じのだ。ちょいと特別製だけどな」

片手で持ち上げたソレ…ブレードライフルの銃身を軽くコンコンと叩きながらそう言うが、見た目に圧倒されているようでクリアのブレードライフルに皆釘付けになっている。

「さて、最後はリィンだぜ？　」

「あ、ああ。俺のはこれだな…」

そう言ってリィンは腰の鞘から刀身を出す。見事に打ち鍛えられたその刀身は美しい、その一言であった。クリアもその刀身を見て「へぇ…」と声を上げている。

「それって剣？　」

「帝国のものとは違うようだが……」

「――刀だな」

「ああ…知っているのか？　」

「……ま、そんなとこだな」

苦笑しながら言葉を濁すクリアにリィンたちは疑問を抱きながらもそれを口にすることはなかった。それもそのはず、これから共に過ごして行くと言っても今はあったばかりだ。それなのにあまり喋りたそうに無いことを根掘り葉掘りするのは自分にとっても相手にとってもあまりいいものではないとわかっているからだろう。

「刀って…？　」

「ああ、ちょっと切れ味が良くてな。扱いが難しいんだ…俺もまだまだだよ」

「えー？　すごく様になっているんだけどなぁ」

「ふふ、そうだな。それにかなり綺麗な刀だ」

「そうかな？　でも、ありがとう……さて、他のメンバー立ちに比べた

ら結構出遅れているし、そろそろ行くとしよう」

リィンが刀を鞘に収めながらそう言う。クリアたちも異論はないようで、みんな頷いて奥の通路の方へと歩いていく。が、一人クリアは

（どーせ、サラさんのことだから最後に面倒な仕掛けか何かあんだろうなぁ…）

と考えながらリィンたちと歩いていくのだった。……そして、奇しくもそのクリアの予想が当たってしまう事になるとは、クリア本人も思いもしなかった

act03

「おらよっと……取り敢えず、コイツで最後か」

「ああ、みたいだな」

「あ、あはは、流石だね三人とも。ついていくのに精一杯だよ」

最初落ちた（というか落とされた）広間から続いていた通路を進んでいると、サラが言っていたように魔獣が徘徊しており、それを倒しながら進んでいるのだが、戦闘に慣れていないエリオットは既に息を切らしながらクリアたちに何とか食らいついている状態であった。

「大丈夫かエリオット？　少し、休憩しようか？　」

「うん……はぁはぁ、そうしてもらえると助かるかも」

「ふぅ…いったいどれくらい進んだんだろうな？　似たような道ばかりだからよく分からないが」

「まだまだあるんじゃねーの？　結構な高さから落とされてんだからよ」

座り込んでいるエリオットの周りを囲むようにクリアたちが立っているが、エリオット同様で慣れない戦闘が多かったためかリィンやガイウスもエリオット程ではないが、少し息を切らせて汗も掻いている。…クリアに至っては息も切れておらず、汗も掻いていないのだが。

「それはそうと、クリアは凄いな…」

「…なんだよいきなり」

「いや、さっきの戦闘もそうだけどさ、俺らのサポートしながら戦闘してただろ？　俺ら以上に動き回っているっていうのに全然疲れているように見えなからさ」

「あー…まぁ、スタミナには自信があるからな。ソレに、ちょいと厳しい環境で育ってきたからお前らよりも動けるだけだっての…あんま実力的には変わんねーさ」

　頬を掻きながら苦笑するクリア。実際的には実力的にもそこそこ差があるのだが、クリアはあえてそれを言うことを控えた。別に落ち込んだりはしないだろうが、念のためにである。それに、クリア自身あまり学院に来る前のことを誰彼においそれと話したくはないのである。

「そうなんだ……うん、もう大丈夫。ゴメンね時間とらせて」

「気にすんなって。チーム組んでんだ、そこら辺は遠慮せずに行こうぜ？　」

「はは、そうだね。ありがとう」

　クリアが言った言葉に照れくさそうに笑うエリオット。しかし、彼の後ろには魔獣が彼に狙いを定めていた。ソレにいち早く気づいたリィンがエリオットに向かって

「エリオット！　後ろだっ!!　」

「え？　う、うわぁぁッ！　」

「ちぃっ！」

完全に油断していたエリオットめがけて飛びかかってきた虫型の魔獣の攻撃はエリオットを押しのける形でその場から移動させブレードライフルで虫型魔獣の攻撃を間一髪でクリアが防ぐ。しかし、彼の両手が塞がっている今の状況では虫型魔獣に友好的なダメージを与えることができない。

そんな中、リィンたちの背後から一筋の閃光が飛んでいき虫型魔獣に直撃し、体制を崩す。そこにすかさずクリアは手に持っていたブレードライフルで魔獣の息の根を止める。

「良かった……大丈夫だったか？」

「おう、助かったぜ…えーっと、確か…」

「マキアス＝レーグニッツだ。…先程はすまない少し頭に血が上っていたようだ」

魔獣の体制を崩す一撃を放った正体は先ほどの広間でユーシスと揉めていたマキアスだった。リィンたちもすぐにクリアの下に駆けつけて怪我はしていないか聞いてくるが、クリアは問題ないと返す。

「クリア＝ヴィルヘイム…さっきは本当に助かったぜ」

「エリオット＝グレイブだよ。よろしくね」

「リィン＝シュヴァルツァーだ。よろしく」

「ガイウス＝ウォーゼルだ」

それぞれ自己紹介が終わったところでマキアスが申し訳なさそうにクリアたちを見ながら何かを言おうとしているが、どこか躊躇っているようにも見えた。それが気になったクリアはそれを促すと、マキアスは言いにくそうに

「すまないが、君たちの身分を確認させてもらってもいいだろうか。…一応、貴族かどうか知っておきたくてね。ああ、別にそれで対応を変える訳ではないんだ。ただ、念の為に確認しておきたくてね」

「俺はそんな上品な血を持った覚えはないね」

「僕も、平民だけど……」

「俺は元々留学生としてやってきているし、貴族とやらがどんなものかあまり分からないな」

「そうか…」と少しホッとしたような表情でマキアスはそう呟く。そして、残りの一人…リィンを見ると自然とクリアたちもリィンの方へと視線が行く。当の本人はどこか複雑そうに目を閉じると

「――――――少なくとも高貴な血の生まれではないことは確かだ」

（？　少なくともってのはどういうこった？　）

リィンの言い回し方が引っかかったクリアだが、周りの者たちはその事に気付いた様子はない。恐らく、彼の言い回しが引っかかったのはクリアだけだろう。…ただ、確証が無いためただの気のせいかもしれない。かと言って本人にそこまで立ち入ったことを聞くのはクリア当人としてもあまり好まない。なにせ、自身が立ち入られることを好まないからだ。

「ま、取り敢えず進むとしようぜ？　この調子じゃ日が暮れても文句言えねーからな」

「あ、ああ。そうだな、そろそろ行こう」

難しい表情をしていたリィンはクリアの促す声に我に返りそう言う。その様子にエリオットたちも少し訝しげに思っていたが、特に問題はなさそうだと判断したのか、特にそのことについて聞こうとせず、前を歩くリィンについていくのだった。

◆

「おっと…」

「ああ、そなた達か…その様子だとそなたの方も頭が冷えたようだな」

「ああ……その件に関してはすまない。この通り頭も冷えたよ」

魔獣を倒しながら進んでいると、クリアたちは女子のチームと遭遇した。マキアスは場の空気を悪くしたことを申し訳なさそうに謝るが、青色の髪をポニーテイルにした少女が代表して

「もう済んだことだ。次から気をつけてもらえればいい」

と言いながら、優しく微笑んだ。マキアスはほっとしたように安堵のため息をこぼしていたのだが、その横で金髪の少女がリィンを鋭い目つきで睨んでいた。…勿論リィンはその視線にたじろいで何も言

えずにいる。それを見かねたクリアが助け舟を出すかの如く

「あー、そういやあんたらの名前聞いてなかったな。俺はクリア＝ヴィルヘイムだ」

「……ふむ、そう言えばそうであったな。私はラウラ＝S＝アルセイドだよろしく頼む」

クリアの意図が分かったのか青髪の少女…ラウラもクリアに続く形で自己紹介をはじめる。リィン、マキアス、エリオットは彼女のファミリーネームを聞いたことがあるようで目を見開いていたが、帝国の外から来たクリアとガイウスは首を捻って疑問を抱いているような表情をしていてた。

その後も互の自己紹介が続いていったのだが、問題は金髪の少女――アリサ＝Rと名乗る少女である。明らかにリィンに敵意をむき出しで自己紹介の時も敢えて言わなくとも良いことを言ってそのままその場を去っていった。当然リィンは落ち込み、周りのクリアたちは苦笑せざるを得なかった。

「……もしそちらさえよければ、僕たちと一緒に行動しないか？　女子だけで此処をうろつくのはいささか危険だと思うんだが…」

「――――――いや、気持ちはありがたいが遠慮しておこう」

「な!?　しかしッ…『あーそりゃ残念。せっかく女子と組めると思ったんだが、断られちまったらしょうがねーか』クリア!?　君まで何を言っているんだ!?　」

「まぁ、落ち着けよ。じゃーな、ラウラとエマ。プンスカ怒って先に行っちまったお嬢とはぐれるんじゃねーぞー」

半ばからかい気味に言うクリアにラウラとエマは苦笑しながら、先に行ってしまったアリサの後を追うようにしてクリアたちの元を去っていった。しかし、マキアスはクリアの行いに納得がいかないようで彼に詰め寄り

「どうして彼女たちだけで行かせたんだ！　君も魔獣が危険であることは重々承知だろう⁉　此処は、多数で固まって行動したほうが…」

「危険は少ないってか？　まぁ、そりゃそうだが」

「だったら何故！　」

「アホか。お前　」

ポコッと軽くマキアスの頭が叩かれる音がする。突然のことに面食らったマキアスだが、すぐに正気に戻りまた怒鳴り出す。その様子をリィンたちは唖然としながら見ていながらも口を挟もうにも挟めない状況であることから何も出来ずにいた。クリアはというと、怒鳴り散らすマキアスの声を売るさそうに片手で耳を塞ぎながら、呆れたように

「ラウラ達と行動するってことはラッキースケベを発動したリィンとその被害者であるお嬢…アリサも共に行動するってこった。リィンに他意はなかったとは言え相手は年頃の女子だ。事故だとしても自分の胸に顔をうずめた相手と行動するってのは抵抗があるだろ……多分」

「それは、そうかもしれないが…」

「そんな状況で共に行動してみろ？　うまく連携が取れるとは俺には

到底思えないね」

「む……」

「それにアイツ等なら大丈夫さ。特にラウラ……アイツは恐らく俺たち《Ⅶ組》最強だろうな」

「ああ、間違いないだろう。なにせ帝国に双璧をなす《ヴァンダール流》の対の剣術《アルセイド流》の使い手だ」

「「え、ええ!?　」」

　クリアとリィンから衝撃の事実を伝えられたエリオットとマキアスは驚愕の声を上げる。ガイウスは成程といった感じで納得している様子を見せている。多方、ラウラの実力を感じ取っていたのだろう。

「あ、アルセイド流って帝国屈指の実力者《光の剣匠》ヴィクター＝S＝アルセイド子爵の!?　」

「ああ。彼女も名乗っていただろ？　アルセイドって」

「た、確かに言っていたが…まさかあの」

「そんなに有名なのか？　確かにラウラ自身からはかなりの実力を感じたが」

「まぁ、有名っちゃあ有名だな《光の剣匠》は……ぶっちゃけ、有りえない程の実力者だしな」

　四大名門のことを知らなかったクリアだが、光の剣匠…ヴィクター

＝S＝アルセイドの事は知っているような口ぶりだった。しかし、ラウラがその《光の剣匠》の娘だと知った衝撃の方がエリオット達には大きかったらしく、クリアの呟きは誰にも届いていなかった。

「と言う訳だマキアス君。これで安心したかね？　」

「あ、ああ。それ程の実力を持った彼女がついていれば、安心だ…と言うか何だその喋り方」

「ま、そうは言いつつも『もしも』の事があったら心配だし、俺がフォローに行ってくるわ」

「お、おい!?　僕の質問は無視か!?　しかも、さっきと言っていることが全く逆じゃないか!?　」

「細かいことは気にすんなよ石頭。　『もしも』の事があったらの保険のためだって言ってんだろ？　」

　石頭と呼ばれたことにショックを受けているマキアスをよそにクリアはラウラたちが進んでいった方向へと歩き始めた。その様子に少し違和感を覚えたリィンだったが、その違和感を埋め込むように

「クリア、彼女たちのこと頼んだ」

「……おう、もしかしたら余計なおせっかいかもしれないけどな」

　と、振り向くことなくヒラヒラと手を振ってさらに進みだす。その時のクリアの表情はリィンたちからは見ることができなかったが、まるで『重い足枷が外れたとでも言うような開放感溢れた表情』をしていたのだが、それを彼らが知る由もないのだった。

act04

リィン達と別れた後、クリアは己の獲物であるブレードライフルを肩に担いでのんびりと歩いていた。時折現れる魔獣は肩に乗せたブレードライフルで屠り、先へと進んでいく。

「はぁ……メンドくせぇ」

クリアはそう言いながら次々に襲ってくる魔獣を己の獲物で切り伏せ、周りを囲まれれば銃弾を囲んでいる魔獣相手にばら撒き、それで体制を崩した魔獣から次々に屠っていく。襲ってくる魔獣の攻撃を紙一重で避け、ブレードライフルを持っている手とは逆の手で制服の中に隠していたナイフで魔獣の頭を切り落とす。そんな事が数十分かはたまた数分か分からないが続いたあと、そこには魔獣の死骸とクリアが一人立っていた。

当の本人である、クリアはというと、多数の魔獣を倒したにも関わらず息を切らすこと無く立っている。その様子はどこか物足りなさそうにしているようにも見えた。

「ま、所詮学院内の魔獣って訳だし雑魚でも、仕方ねぇか」

ぶつくさ言いながらもクリアは進んでいく。しばらく進んでみるとクリアが進んでいる方向から剣戟のような音が響いている。女子のチームだろうかと足早に進んで行こうとして、ある気配に気付き足を止め、この部屋を支えている柱の一つを睨んで

「バレバレだぞフィー」

「……やっぱり、クリア相手に気配を隠すのは難しい」

睨んでいた柱から出てきたのは先ほど広間ほどの広さがあった部屋でラウラの誘いを無視して先に進んでいったフィーが居た。

「…ま、前よりは精度は上がってたと思うぜ？　まだまだだけどな」

「褒めるのか落ち込ませるのかどっちかにして欲しい」

「ま、精進しろってこったよ。……で、最奥（さき）見てきたんだろ？　」

「ん。そう遠くないところに上に続く階段があった。多分そこから上がれるけど…」

「何かありそうだったってか？　」

クリアがそう問うとフィーは静かにコクリと頷く。その答えはクリアも予想できていたので、驚きはなかった。寧ろ、『あの』サラのことだ。何もないと言うことは無いと踏んでいる。

「…あの人のことだから簡単には終わらせてくんねーんだろうな。…はぁ、メンドくせぇ」

「同感。サラもめんどくさい事をする」

クリアたちが奥の方へと到着すると、そこでは既に戦闘が繰り広げられていた。少し大型の魔獣をクリアたちを除く全メンバーで戦っているのだが、どうも有効打を与えられていない様子だ。

「俺らが一番最後かいな」

「だね。　左右から奇襲をかけるよ　遅れないでね」

「ハ、フィーこそ遅れんなよ？　」

リィンたちがひるませた魔獣に向かってクリアとフィーはそれぞれ左右に分かれて魔獣を挟むようにして接近していく。

そして、魔獣が体制を立て直そうとしたまさにその直後に、フィーが自分の獲物である小銃剣から導力弾を打ち出し動きを鈍らせ、そこにクリアがブレードライフルを魔獣に向かい振り下ろす。魔獣は醜い悲鳴を上げながらクリアが居た場所を尻尾でなぎ払うが、それを読んでいたかのようにクリアはバックステップでそれを回避して離脱したところをユーシスのアーツが魔獣を襲うが、あまり効いたようには見られない。

「げぇ、メンドくせぇ程タフだな　」

「ああ、さっきから何度も攻撃しているんだが、正直有効打を与えたれた気がしない」

「どうする、このままじゃ不味いぞ　」

「と言っても、どうもできないじゃないッ！　」

疲労が限界に来ているのか、既にチームワークと呼べるような連携は取れなくなっており、殆どが個々人の攻撃で何とか魔獣を怯ませる程度になってしまっている。会話ですら互いの意思疎通ができなくなっている状況だ、早々に何とかするべきだろうとクリアは考えてはいるのだが、何も思いつくことはない。

そんな中、

「一旦、落ち着こう。恐らく、あの魔獣は俺たちが、連携しないで倒す

ことは殆ど無理だろう。きっと、教官もその事を見越してあの魔獣を此処に置いているんだ。それなのに俺たちが争っていたら、倒せるものも倒せないと俺は思う。だから、此処はみんなでうまく連携をとって、あの魔獣を倒そう。俺たちはまだ始まってもいないんだ。始まってもいないのに終わるのは嫌だろう？　」

そんな、リィンのセリフを聞いいたメンバーたちは一瞬硬直したように黙った。そして、一番最初にクリアが大声を上げて笑い始めた。

「フクッ……ハハハハっ！　リィ、おめ、どんだけ恥ずかしいこと言ってんだよ！　クサいわ！　」

「なっ　」

「確かに。クリア程大爆笑するのもどうかと思うが、リィンのセリフも体外だな」

「聞いているこっちが恥ずかしくなってきちゃったよ」

と言われ、思い返してみると自分でも漸くどれだけ恥ずかしいことを言っていたのか理解し、顔を真っ赤にして黙り込む。が、戦闘中なので立ち止まる、なんて自ら的になるような愚かな真似だけはしないが。

「……だが、確かに私たちはまだ何も初めてはいないな」

「ええ、教官に一言文句言ってやらないと気がすまないわ。それに個人的にも聞きたいことがあるしねッ」

「私も気になることがあるので此処で諦めるわけにはいきませんね」

先程まで折れかかっていた心がリィンの言葉で再び力を得たようにメンバーの勢いが増してきた。それこそ、先ほど攻撃を加えていた時よりも、だ。

そして、唐突にクリアたちⅦ組のメンバーの体が青白い光に包まれる。それぞれが青白い光に包まれていることに驚きを隠せないでいるが、現在は戦闘中で一瞬の気の油断が致命的な隙になりかねないため、動きを止めることなく魔獣へと向かっていく。

「エリオット、マキアスッ！　」

「うん！　」

「任せたまえッ！　」

リィンを含むエリオット、マキアスが先行して魔獣に攻撃を仕掛ける。マキアスが武器であるショットガンを魔獣にめがけて撃ち込み、怯んだ好きにリィンが刀で切りつけ、続けざまに詠唱を終えたエリオットのアーツ《アクア・ブリード》が魔獣を捉える。

「■■■■■ーーーッ!!　」

連撃のダメージは流石に効いたようで、魔獣は悲鳴のような咆哮を放つ。

「くっ、なんて咆哮だッ」

「耳がっ　」

「ちと、五月蠅すぎんじゃねーのッ!?　」

直接的なダメージは皆無だが、あまりの大声にクリアたちは一瞬怯んでしまう。魔獣がその好機を逃すはずもなく、一番近くに居たリィン達にしっぽを叩きつけた。

「グッ!?　」

「ぐはっ!?　」

「うわぁぁっ！」

当然、咆哮で怯んでいたリィン達は防御をしようとするが、間に合うことなく魔獣の尻尾を叩きつけられ、後方へと飛ばされる。

「だ、大丈夫!?　」

「ち、治療します!!　」

「あ、ありがとう　」

「ぐ、すまない……」

「流石に、効いたな……ッ」

アリサとエマが治療に向かうと同時に止めを刺そうと魔獣がリィン達の方へと向かおうとしたところに、跳躍したフィーとクリアによる上からの一撃で魔獣はなすすべもなく地に伏し、リィン達への追撃は妨害される。

「ハッ、そう簡単にさせるとでも思ってんのかよ」

「舐められてるみたいで、気に食わないね」

「さて、このクソ魔獣。まだまだ勝負はこれからだぜ？　」

地に伏す魔獣にブレードライフルを向け不敵な笑みを浮かべてクリアはそう告げる。魔獣の方も、心なしか目つきを鋭くしてクリアを睨んでいるように感じられた。

act05

「ッチ、っんとにメンドくせぇなぁ……っと　」

「■■■■■■!!　」

　魔獣がしつこく繰り出す攻撃をクリアは武器で防いだり、避けたりして直撃こそしていないが、あちこちに軽い傷を負っている。先ほどの挑発で、他のメンバーに攻撃は行かなくなった代わりに集中してクリアに攻撃が行くようになったのだ。

「口は災いの元って確か、東方の国のことわざってやつにあったよなぁ！　今がまさにその状況ってか……笑えねぇ」

「口ばっかり動かしてる暇があったらちゃんと引きつけておいて頂戴っ!!　」

「へいへい、わかってますよっと……全く、人使いの荒いお嬢だこと　」

　余裕綽々のように軽口を叩いてはいるものの、今まで疲労という疲労を感じていなかったクリアも流石に疲れが出始めたのか、最初よりも動きが鈍り、息も荒くなってきている。

　クリアだけに負担がいかないように、リィンやガイウス達前衛組が魔獣に攻撃をしているのだが、それでもリィン達の方に攻撃が行くことはなく、クリアへと攻撃を仕掛ける。

「ちっ……」

「クリアっ!? 」

ついにバランスを崩したクリアに魔獣の攻撃が襲いかかる。咄嗟に後ろに身を引いてダメージを逸らしたが、それでも勢いが強く、クリアは後方の壁へと叩きつけられる。

「いっつつ……洒落になんねぇ力してんのな…」

「大丈夫か？ 」

「おう、サンクス。助かったわ」

ガイウスがクリアの補助をする。幸いにも、寸前で身を引いていたので直撃よりは大分ダメージを減らすことができたようだが、それでも体に蓄積されたダメージもあり、やはり最初のような動きはできず、一撃離脱で攻撃を繰り出すのが関の山になっていた。

「クリアは援護に回ってくれ、俺たちが前衛をやろう」

「……わりぃ、頼むわ。流石にしんどい」

「どうせなら、そこで休んでいるといい。貴様が休んでいる間に倒してやる」

「ハ、そりゃいい。じゃ、遠慮なくらくさせてもらっておくぜ」

クリアのその言葉を満足げに聞くとリィン達は魔獣に接近して、攻撃を繰り出す。魔獣の方も漸くというべきか弱ってきたようで、動きに鈍りを感じた。エマ、エリオットはアーツを中心に攻撃・補助を行い、アリサ・マキアスが銃・弓による中・遠距離の攻撃を繰り出し、リィン達前衛組が魔獣の攻撃を避けながら攻撃を行うフィーは状況に応

じて中距離と近距離で立ち回っている。そんな中、クリアも

「……射撃はあんまり得意じゃねーが、このまま何もしないってのも、癪だからな」

そう呟きながら己の武器であるブレードライフルを構え魔獣に向けて放つ。それに魔獣はのけぞり、動きを一瞬止めてしまう。そして、その一瞬を集中力が極限状態まで高まっているⅦ組のメンバーたちが見逃すはずもなく、

「よし！　特大の行くよっ!!　」

そう言ってエリオットが放ったのは水属性上位に当たる導力魔法《クリスタル・フラッド》魔力でできた氷が魔獣を凍てつかせ動きを封じ込める。当然、魔獣は体を凍てつかせる氷を破壊する術を持っておらず身動きを取れないまま咆哮を上げようとする

が、

「今だっ!!　頼むラウラっ！　」

「ああ、任せるが良いッ!!　」

身動きの取れない魔獣の頭を自身の武器である大剣で叩き切る。すると、ゴトリと少し鈍い音を響かせて魔獣の頭は地に落ちる。魔獣の頭が、地に落ちたと同時に体は元の石へと戻り動かなくなってしまった。

「……やった、のか？　」

「みたいですね……」

「こ、怖かったー」

魔獣を倒したことを認識すると、メンバー達は腰が抜けたかのようにその場に座り込む。誰もがボロボロで汗だくになっている。

「それにしても、さっきの僕たちを包んだ光はなんだったんだ？　」

「確かに気になるな……この戦術オーブメントから出ていたように感じたが」

「それに、あの光に包まれているとき妙に力が湧いてきたというか、なんか不思議な感じがしたわ」

「ＡＲＣＵＳから出た俺たちを包む光……もしかしたら、アレが」

「そ、貴方たちが体験したあの現象こそＡＲＣＵＳの真価の一つね」

リィンの言葉を引き継ぐように聞こえてきた声。それは紛れもなく、クリア達Ⅶ組のメンバーを此処に落とした張本人……サラ・バレスタイン教官の声だった。

「ん～♪　いや～やっぱり最後は友情とチームワークの勝利よね。うんうん、いろいろあったけどお姉さん感動しちゃったわ。それになかなかカッコいいこと言うじゃない。リィン」

「ぷ、おねーさんって柄じゃね……だっ⁉　」

「うっさいわよ、クリア。せっかくいい気分なんだから水を差すんじゃないの」

「……へーい」

ヘラヘラしながら軽口を叩くクリアにサラはどこに隠し持っていたのか分からないが、棒きれのようなものをクリアの額めがけて投擲する。クリアもクリアでそれを避けるような動作はせず、敢えて当たる……というよりはさすがに疲れていて避ける気力もなかっただけのようだが。

「……単刀直入に聞く。バレスタイン教官、特科クラスⅦ組……その真の目的とはなんだ。まさか、身分に関係なく仲良くしましょう、というだけではあるまい」

「まぁ、その考えもないわけではないんだけど…やはり、一番は貴方たちが持っているその新型戦術オーブメント《ＡＲＣＵＳ》の適合率がずば抜けて高かったってことね。貴方たちが体験したあの青白い光……アレは戦術リンクと呼ばれる今開発のものでね……究極的にはその戦術リンクでお互いの考えを読み取り、連携の強化を図ろうってもの。アンタたちも体験したと思うけど、戦術リンクの力は中々強みになるわ」

「……確かに、あの青白い光に包まれているとき、みんなの攻撃する場所が手に取るように分かった気がする」

「ええ、これが使えれば少数による精鋭部隊が誕生しますね……」

エリオットやマキアス達は納得したように手に持っている戦術オーブメント《ＡＲＣＵＳ》を見つめているが、クリアはどこか納得していないかのようにサラを見ている。サラもそれに気づいていながら、敢えてその視線を無視して話を続ける。

「ま、オリエンテーションも無事終わったことだし、そうね。約束通り

文句を聞いてあげる。トールズ士官学院はこのＡＲＣＵＳの適合者として君たち１０名を見出した。やる気のない者や気の進まない者に参加させるほど予算的な余裕があるわけじゃないわ。それと、本来所属するクラスよりもハードなカリキュラムになるはずよ。それを覚悟してもらった上で《Ⅶ組》に参加するかどうか――改めて聞かせてもらいましょうか」

そう聞かれ、誰もが黙り込む。それを見て、言い忘れていたことを付け加えるようにサラは

「そうそう、別に参加しない場合は元々振り分けられるクラスハズだったところにちゃんと入れるから安心しなさい。平民なら平民のクラス、貴族なら貴族のクラスに、ね」

が、誰も一言も言わない中、目を閉じて考えていたリィンは静かに目を開き、サラを見据えると信念の通ったような待っくすぐな声色で

「――――――リィン＝シュヴァルツァー。特科クラスⅦ組に参加させてもらいます」

「リィン!?　」

「……へぇ」

「一番乗りは君かぁ……何か色々事情があるみたいね」

サラは含みのある言い方をしてリィンに問いかける。が、リィンは静かに首を横に振り

「いいえ、俺の我が儘で行かせてもらった学院です。自分を高めるためならどんなクラスでも構いません」

「ふ～ん、そっか。分かったわ。他はどうかしら？　」

サラに促されるが、まだ他のメンツは決めあぐねいているようで、黙り込んでいるまま。そんな中、クリアが一歩前に出て

「んじゃ、俺もやるわ。　クリア＝ヴィルヘルム特科クラス《Ⅶ組》参加させてもらうぜ。　他のクラスにいるより、面白そうだしな」

「…アンタなら、そういう理由だと思っていたわよ。全く、面白半分でやるようなことじゃないってわかってるくせに…」

「ハハー、わりィわりィ。コイツだけは性分だからどうにもなんねぇんだよ」

「ま、いいわ。次…」

また、サラが促すと今度は決まったようで次々に参加の意思を伝えていく。そして、フィーの番になると、彼女はめんどくさそうに

「サラが決めていいよ」

「ダメに決まってんでしょ」

「……ちっ。じゃ、クリア。決めて」

「とんでもねぇキラーパスだな、オイ」

「あのねぇ……自分でちゃんと決めるって約束でしょうが」

呆れたようにサラはそう言いながらフィーを諭す。その姿はさな

がら年の離れた姉妹にも見え、Ⅶ組のメンバー達はどこか温かい目で見守っていた。

「む……めんどくさいなぁ。じゃぁ、参加でいいよ」

本当にめんどくさそうに参加の意思を告げる。……やる気がないわけではないようだが、別段やる気に満ち溢れているという様子でもないことから、参加でもそうでなくてもどちらでもいいと思っていたようだ。

その後、ユーシスとマキアスもいがみ合いながらではあるが、Ⅶ組参加の意思を告げる。まぁ、いがみ合いと言っても一方的にマキアスが噛み付き、それをユーシスが簡単にいなしていただけなのだが。

ユーシス本人としては、此処に来る前にクリアに向かって言った言葉の方が学院に来てからの何よりの本心であり、Ⅶ組に参加することの根幹とも言えるかもしれない。勿論、他にも理由はあるのだろうが。

こうして、Ⅶ組は無事誰一人欠けることなく正式に設立されたのだが、色々と問題が立ちふさがる。前途多難な設立のようにも感じられた。

◆

そして、オリエンテーションがあった日の夜のこと。クリアはⅦ組に宛てがわれた第三寮館の屋上で酒を飲んでいた。部屋で飲んでい

れば確実に見つかってしまい、説教の後、サラに酒を奪われてしまうことを理解していたため、屋上で飲んでいるのだ。

「あー……今日は疲れたな。けど、面白い奴もいたもんだな」

そう言いながら、ユーシスのことを思い出す。四大名門という大貴族の嫡子でありながら、固まった考えを持っていないところには好感が持てた。性格に難が有るようだが。

「懐かしいなぁ…俺に噛みついてくる奴なんて、『アイツ』くらいなもんだったからなぁ……」

そう思いながら、クリアが思い出すのはここに来る前の自分がいたところのこと。捨てられて身寄りのないクリアを拾ってくれた『あの人』がリーダーだった、クリアのたった一つの居場所。

その居場所も、『あの人』が死んでしまい、そこにいる意味を見いだせなくなり去ってしまったわけだが。

「……いけね、感傷に浸っちまったな。せっかく、旨い酒なんだ感傷に浸ってまずくなったら元も子もねぇな」

「あら、確かにこの酒うまいわね～」

「だろ？　値段もそこまで高くねぇのに、この旨さ……ってサラさん!?」

「やっほ～……感傷に浸ってたクリア君♪」

おちょくるようにそう言われて、柄にもなくクリアは顔を赤らめる。サラの方はというと『してやったり』といったような感じでニヤ

ニヤしている。

「い、いつから？　」

「ふふーん♪　……聞きたい？　」

「いや、やっぱいいや。どうせ、最初っからいたんだろうし」

「は・ず・れ。途中からよ。ちょーっと、涼みたくなったから屋上に来てみたら妙に感傷に浸っているアンタが居たってわけ」

「……忘れてくれ」

　恥を忍んでそう頼むクリア。流石に恥ずかしかったのか、はたまた自分の柄じゃないことを気にしているのか分からないがその顔は先程と同様赤く染まっていた。サラはサラでグビグビとクリアが持ってきていた酒を容赦なく飲みながら

「ん～そうねぇ……本来ならこのことで一晩からかい倒すんだけど、いい酒飲ませてもらったし、いいわ。忘れたげる。感謝しなさいよ～？　」

「ぐ……」

「ま、一つ真剣な質問。やっぱり、『あの人』の事割り切れてない？　」

　言葉を詰まらせるクリアにサラは今までの雰囲気を一変させ、そう尋ねる。クリアもバツが悪そうな表情をして少し顔を俯かせ小さく頷く。

「そっか……アンタが他のⅦ組の子達と話しているの見てなんか壁が

あるように感じたけど、やっぱりそれは間違いじゃなかったか…」

「もう、結構経つけどさ……やっぱ、割り切れねぇんだわ。　過ぎたことに囚われてちゃ前になんか勧めねぇって分かってんだけどよ　」

そう言いながら、クリアは立ち上がり、寮の中へと戻る階段のほうへと向かっていく。

「ちょっと、クリア。この酒どーすんのよ？　」

「ああ、ちょっともう飲めねぇから、サラさんが飲んでてくれ　んじゃ、おやすみ…」

引き止めることもかなわず、クリアはそのまま階段を下りていった。

◆

その姿を見送ってサラは軽くため息を吐くと、

「全く……何がもう飲めない、よ。私より酒強いくせに」

不満げにそう呟いてクリアが残していった酒を一気に飲む。少しアルコールがキツかったためか喉が熱い。

「ほんっと……ままならないわねぇ　」

一人夜空を見ながらそう呟く。彼女の心持ちとは裏腹に夜空を星たちが綺麗に彩り、此処トリスタ……引いては帝国を照らしているのだった。

act06

トールズ士官学院の入学式及び特科クラス《Ⅶ組》の成立から早、二週間の月日が経った。最初は慣れないことや戸惑うことが多かったクリア達だが、二週間もすると慣れたようで、何のトラブルもなく学院生活を送っていた。そして、ある日の午後のＨＲでサラは

「……そろそろ学院生活にも慣れただろうし、頃合でもあるから今日から自由行動日を挟んだ二日後、実習テストを執り行うわ。そしてそこで改めて《Ⅶ組》のカリキュラムについて説明するわ」

「！　ようやくか…　」

「ど、どんなのなんだろう……」

今までは他のクラスと同じカリキュラムを受けてきたⅦ組のメンバー達だが、漸くⅦ組の特別カリキュラムを受けることになると聞いて好奇心を覗かせるものは少なくない。

「ってなわけだから、自由行動日をどう活かすかも君たち次第ね。遊ぶもよし、テストに向けて己を磨もよし、好きにするといいわ。……あ、あと部活動もいいかもしれないわね。今日から部活動に所属できるようになるわ。　ま、頑張りなさいな」

そう言うと、サラは副委員長であるマキアスに号令を促し、ＨＲが終了する。すると、その直後にガイウス、エリオットはリィンと、エマ、アリサ、ラウラはそれぞれどの部活に所属するのかと会話に花を咲かせ、フィー、マキアスはそくささと教室を去っていく。そんな中、クリアとユーシスは

「なー、ユーシスはなんか部活に入んのか？　」

「ふん、なぜ貴様にそのようなことを一々言わねばならん」

「いいじゃねーか。あっちみたいに俺らも部活話で盛り上がろうぜ？　」

「部活話がしたいのであればアイツ等してくればいいだろう。　大体、なぜ俺なのだ？　」

「……ま、気分だな」

「今すぐ、あっちの会話に混ざって来い　」

　シシシと笑いながらふざけた回答をするクリアにユーシスは青筋をこめかみに浮かべながらそう言う。そのやりとりはリィン達やアリサ達にも聞こえていたようで誰もが苦笑をしていた。

「でも、よく物怖じしなくて話せるよね。……僕だったらちょっと無理かなぁ…」

「ああ、俺もあそこまで露骨に近づくな、といった雰囲気を出されるとちょっと話しかけづらいな」

「そういう点で、見るとクリアって結構すごいのか？　」

「や、じょ、冗談だからそんなに怒るなって……」

「貴様の冗談は質が悪い上に、冗談に聞こえん」

　平謝りをしているクリアを見てリィンは自分の言ったことを撤回

したくなった。…まぁ、周りも周りでそんな訳あるはずもないか、と思ったようだが。

「……フン、付き合ってられん」

そう言って、ユーシスは席を立ち上がり、教室の出入り口の方向へと向かって行った。

「あちゃー、ちとやりすぎたな」

「流石に、な」

クリアの呟きにガイウスが同意するようにそう言う。が、ユーシスは教室を出る直前で

「……馬術部の見学に行く。来ると言うなら別に来ても構わん」

「ククク……はいよ 」

素直に言えないユーシスに苦笑しながら返事をするクリア。それを聞き届けると、今度こそユーシスは教室を去っていった。その際、耳まで真っ赤になっていたのは羞恥心からだったのだろう。四大名門の子息であるというプライドから先ほどの言い方が最大の譲歩だったのだろう。

「本当仲いいよねクリアとユーシス」

「んー、まぁそうだな。 仲いい方ではあるか」

「? クリアにしては珍しいな。てっきり、『だろ? 俺たち親友だからな』とかいうかと思ったが……」

「……色々あるんだよ。おにーさんにはな」

「おにーさんって……同い年だろう」

「さてな。案外年上かもしんねーぞ？　」

からかうようにそう言い残して、クリアも教室を出ていこうとする。が、一瞬、本の一瞬であるが教室を出ようとするときのクリアの表情が全て抜け落ちたかのような無表情をリィンは見た。咄嗟に呼び止めようとしたが、それより先にクリアが教室の外に出たので、それは叶わなかった。

追いかけて聞こうとしたが、クリアのことだ上手くはぐらかせてその場をやりきられると思ったリィンは追いかけることを断念した。これからまだ時間はたっぷりある、また、機会があるときに聞けばいいかと判断し、エリオット達と会話を再開した。……会話を再開させる前に変な顔をしていたのかエリオットとガイウスに訝しげに見られたが。

◆

教室を出たクリアは宛もなくフラフラと学院内を見て歩いていた。ユーシスのいるであろう馬術部の方へ行く前に、学院内を歩き回ろうと気分で思い、そちらを優先した。

「はー……入学して二週間経つけど、相変わらず広えぇなー。迷子と

か出るんじゃねーんだろうか？　」

「むぎゅッ!?　」

　そんな事を呟きながら歩いていると、軽い衝撃が胸のあたりに走り、ぐぐもった声がした。その事に驚いて少し視線を下げてみれば、平民クラスの緑の学生服を纏った茶髪の中性的な顔立ちをした学生がクリアの胸当たりに顔をぶつけていた。

「わりぃ……よそ見してたわ。怪我、ねぇか？　」

「いたた……うん！　怪我はしてないよ」

「そうかい。ぶつかって悪かったな　じゃ　」

「あ！　待って待って！　やっぱり怪我したかも！これは何か奢って貰わないとダメかも…　」

「嘘くさ　」

　必死にそう言う学生を不審な目で見ていたが、唐突に大きなお腹の音が渡り廊下に鳴り響く。……原因となった人物は言わずもがな恥ずかしそうに顔を赤らめていた。　因みに余程お腹がすいているのか涙目になっている。

「……はぁ。仕方ねぇな」

「ほへ？　」

「……何か奢ってやるよ。ここで会ったのも、何かの縁だろうしな　」

「おお！　ありがとー!!　……えっと、」

そう言って学生はクリアの両手をとって自分の小さな手で包み込み、ブンブンと激しく降っている。　こんな感じの対応をされたのはクリアも初めてだった様でその表情には少し戸惑いが見られた。

「クリアだ。クリア＝ヴィルヘイム…お前は？　」

「僕？　ナイラ・アルアジフ！　ナイアでいいよクリア。あと、よく女と間違われるけど、れっきとした男だからね～まぁ、間違えれたからって怒る訳じゃないけどね」

「へいへい。よろしくなナイア」

「えへへー！　こっちこそ（ご飯）よろしくねクリア！　」

笑顔で再びブンブンとクリアの手を掴んで振っている。……クリアとしてはさっさとこの学生…ナイアに飯をおごっておさらばしたい気分なのだが、この嬉しそうな表情を見ていると、どうにも話が切り出しにくいようだ。もし計算してやっているのであれば相当な役者だろう。

そんな事を考えながらクリアは食堂のほうへと引っ張っていくナイアを見ているのだった。……しかし、この後クリアはナイアに飯を奢るといったことを大いに後悔する羽目になるとはこの時は思ってもいなかったのである。

◆

「……」

「んー！　美味しいーッ!!　あ、これも追加してもらっていいですか!?　」

食堂について、メニューを選び出したまでは良かった。しかし、そこから先は全くもっての予想外だったクリアは絶句するしかなかった。次々に食べてはまた追加の品を頼む。それの繰り返しでクリアは5回を超えたところから数えていない。考えていることといえばあの小さな体のどこにそんな吸収力があるのだろうという事だけだった。

「あー、幸せぇー……アレ？　クリアは何か頼まないの？　」

「……ぜってぇ次からお前と食事しねえ」

「ええ!?　な、なんで!?　」

「イヤイヤ、お前人の金でこんだけ食べてんだぞ!?　ちったぁ遠慮しろ！　」

「えー…まだ食べ足りないよー」

「んなの知るか！　俺の金が無えんだよ！　」

そう言って無理やりメニューを選んでいるのを止めて支払いを済ませる。その際、ナイアの表情はとても不服そうだったが、クリアはそんなことを気にしている余裕がなかった。……なにせ、財布の中に入っている金の9割を持っていかれたのだから。

「おーぅ。　俺の財布がずいぶん軽くなったなぁ……」

「えーっと、クリア？　」

「え？　ああ、大丈夫大丈夫、何とかなる…何とかするさ」

　遠くを見ながらクリアはそううわ言のように呟いている。いつもの飄々とした態度が嘘のように暗く沈んでおり、目も虚ろになっている。正直に言えば相当怖い。隣にいるナイアも若干怯えている。

「ご、ゴメンなさい…僕が調子に乗って食べ過ぎたから……」

「……はぁ。もう過ぎだ事だ。気にして…入るけど、ま、大丈夫だ」

「で、でも……」

「奢った俺が大丈夫って言ってんだ。あんま気にされると、こっちもあんまいい気になれねぇよ。……そうだな。もし引け目を感じてんなら、これは貸一だな。いつか返してくれればいい」

　申し訳なさそうに俯いているナイアの頭にぽん、と手を乗せ乱暴に撫でながらそう言う。いきなりのことで驚いたのか、目を丸くしてなされるがままになっていたが、嫌ではないようであった。

「……うん。分かった、きっと返すよ。で、またこっちが大きな貸し作ったらまた、奢ってくれる？　今度はクリアも一緒に食べてさ」

「…ハ、おう。ただ、今度は少しは加減しろよ？　」

「その時のクリアの態度次第だね　」

ニヒヒ、と悪戯っぽく笑うナイアの表情にはもう先程までの落ち込んだ様子はない。何時までも、辛気臭い顔をして相手に迷惑かけるのが嫌だったのだろう。　クリアには経済的迷惑をかけたわけではあるのだが。

「…言っとくが、この貸しはデカいからな？　ちょっとや、そっとじゃ返せると思わねぇこった」

「分かってるよ。…何か、困っていることがあったら呼んでね。出来る範囲で力になれるように頑張るからさ」

「そいつは楽しみだな」

そう言いながら、食堂に備え付けてある時計をふと見ると既に時間は既に学生たちが完全下校する時間寸前だった。クリアはどうりで少ないはずだと思いながらも、ふとあることを思い出した。

――――――馬術部の見学に行く。来ると言うなら別に来ても構わん――――――

ユーシスこの言葉。一件冷たいように見えて、彼が友人であるクリアに最大限の譲歩としていった事、クリアはそれをすっかり忘れてしまっていたのだ。　たかだか友人だから謝れば済む、のかもしれないが、ユーシスは普通以上に気難しい性格をしているためどうなるかわからない。

そう考えたクリアの顔色はみるみると青白く染まっていく。それを不審に思ったナイアはクリアに声をかけようとしたのだが、

「わりぃ！　ちょっくら用事思い出したわ!!　じゃな、ナイアッ!!　」

「へ？　あ、うん……また今度ねー!!　」

疾風のごとく駆け去るクリアに呆然としていて彼の背中が少し見えるくらいになったところで、漸く我に返りそう言葉を掛けるが、届くはずもなく帰ってくるのは虚しい静寂だけだった。

因みにその後、馬術部が活動をしているグラウンドに向かったのだが、誰もおらず寮についたクリアをユーシスが冷たい目で睨んでそれにいつもの体裁を保とうともせずひたすら謝っているクリアをリィン達は見たらしい。

act07

大食い学生ことナイアに財布にあるだけの金の分飯を奢らされ、寮内でふて寝していたクリアが目を覚ましたのは太陽が真上に上がった頃……詰まる所、昼である。

「ふぁぁ……あー…ねみぃ…」

モゾモゾとベッドから這い出るが、目の焦点は合っておらず、足取りもフラフラしており未だ目が覚めたとは言い難い状態だった。フラフラしながら制服に着替えて、一回のリビングへと行き、冷蔵庫の中を開けてみるが、そこには何も入っていなかった……という訳ではなく、材料のみがスペースを取っていた。

「……何にも入ってねぇ」

ここで、漸く目が覚めたようでクリアは途方に暮れていた。昨日、ナイアに有り金の殆どを食い尽くされ残っている金といえば、１００ミラ程度でそれ以外は財布を振っても決して何も出てこない。猟兵時代に稼いだ金額の殆どは学費につぎ込んでいるのでまともに使えるミラはほとんど残っていないことになる。

「……取り敢えず、気を紛らわすためにどっか行くか」

そう言って寮を出て向かった先は……

◆

「え、えーっと……お金がないから、ご飯を食べさせてくれ？　あはは……生徒会にそんな依頼をしに来たのクリア君が初めてだよ」

なんと生徒会室だった。生徒会長の『トワ＝ハーシェル』も初めての依頼に表情を引きつらせていた。それでも笑顔を忘れないのは流石であると言っておくべきか。

「俺だって、こんな惨めな依頼したかねーよ。　暴食漢に有り金分の飯を奢らされてなければの話だけんどな」

「暴食漢って……」

「ナイア＝アルアジフだよ。平民クラスの」

「……あー…ナイア君かぁ」

トワも納得したような表情で苦笑している。その様子からトワも彼の異常な食欲を知っているのだろう。二人してナイアの食欲について頭を悩ませていると生徒会室の扉がノックされた。

コンコン

「あ、はーい。空いてるよ～　」

「失礼します……あら、お取り込み中でしたか？　」

「ううん。大丈夫だよ」

ノックをして入ってきたのは、平民クラスの制服を着た長い黒髪の

少女。その手に抱えているのはどうやら生徒会の仕事の書類のようだ。

「……トワさん、こちらの方は？　」

「あ、この子はクリア＝ヴィルヘイム君。《Ⅶ組》の生徒だよ」

「成程、《Ⅶ組》の生徒、ですか……」

トワに『この子』と言われたことにかなり違和感を感じているようで変な表情をしているクリア。どうやら身長のせいでトワが二年であることを忘れているらしい。

それと、今入ってきた少女に品定めでもされているように見られているためクリアにとっては相当居心地が悪い。それに気づいたのか、少女は

「あ、ごめんなさいね。近くで《Ⅶ組》の生徒を見るのは初めてだから」

「…や、別にいいけどよ」

「自己紹介が遅れてしまったわね。　シオリ＝シラサギよ…よろしくヴィルヘイム君……は少し長いわね。私もトワ会長と同じようにクリア君、でいいかしら？　」

「ま、呼び方は好きにしてもらっていーけどよ。…それより、会長殿飯…」

「あ…そうだね。でも、今回だけだよ？　」

「恩に着るぜ……」

あはは、と苦笑しているトワは机の上の書類を片付けながらそう言う。対してクリアはぱぁあと死んでいた表情がみるみるうちに輝きを取り戻していた。それだけ腹を空かせていたということだろう。

◆

「クスクス……」

「…笑い過ぎだと思うんですケド。シラサギセンパイ」

「ゴメンなさい、でも…ふふ、お腹がすいたから助けてくれって……ホント生徒会にそんな依頼したのクリア君が初めてじゃないかしら」

あの後、トワが仕事を終わらせると三人で食堂の方へと向かっていった。その際、シオリにもトワがいきさつを話した結果今に至るというわけだ。

「もぅ……シオリちゃんもクリア君をからかうのそこら辺にしといたほうがいいよ」

「ふふ…そうね」

「ふぅ……からかわれる側の立場は中々辛いな。いつも、からかう側だったから勝手がわかんねぇよ。分かりたくもねーけど」

「この際にからかうのやめたらいいと思うの私だけかなぁ……」

「やめたくても、やめられないんだよ　気がついたらつい、な」

「……あれ？　クリア？　」

　三人で談笑してると、クリアにとって聞きなれた少女の声がした。声が聞こえた方を見てみると、そこにはフィーが少し驚いたような表情をして立っていた。

「珍しいね。てっきりサラとふたりで朝から飲んでるのかと思った」

「俺サラほど酒が好きなわけじゃねーよ。起きたら飯なかったから会長たちにたかってるだけだ」

「それもどうかと思うけど？　」

「昨日、有り金全部持ってかれたんだよ…　」

「また、変な女？　」

　やれやれ、と言ったふうに首を横に振るフィーを見てクリアは怒りがこみ上げてきたが、トワたちの手前あまり手荒なことはしたくないのかぐっと堪えていた。それよりも、二人はフィーの言った『変な女』のフレーズが気になっているようだが。

「ちげーよ！　なんでお前は有り金持ってかれたって言ったらそこに直行すんだよ！　」

「前科ありだから」

「ぐ、言い返せねぇ……　」

「「言い返せないの!?　」」

「と、とにかく…今回のはマジでちげーんだよ。　いや、変な生徒ってのは違わねーか」

「……どういうこと？　」

「えっと…」

変な方向に思考を行かせてしまったクリアに変わってトワが困ったような表情をしながら事の顛末を告げていく。聴き終わると、フィーは心底呆れたようにため息を吐いてクリアに一言

「バカ　」

と言った。しかし、多少の自覚があるためかクリアは言い返さずにその言葉を受け止める。……多少はショックだったようで少し落ち込んではいるが。

「仕方ない……トワ会長。クリアの分は私が払う」

「え、でも……」

「馬鹿な兄貴分の世話役は私だから」

そう言ってトテトテと食堂の受付にミラを払いに行く。その様子に少し、トワとシオリは呆気にとられていたが、復活したクリアが苦笑しながら

「…前からあーいう風なんだよ。フィーは。変に世話を焼きたがるっ

ていうか…なんつーか分かんねぇけど」

「そうなんだ……（確信はないけど、それって…）いい妹分だね」

「会長殿までんなこと言うなっての…」

勘弁してくれ、と言わんばかりに肩をすくめてフィーが戻ってくるのを待っている。それから直ぐに、フィーは戻ってきたが両手に何かを持っている。

「……アイス。知らないの？」

「いや、知ってはいるけど……なぜ？」

「苦労しているってシェフが同情してくれた…ぶい」

「さいですか…」

ペロペロ食べているフィーを横目にため息を吐く。こういうところを見ていると、時々利用されているのではないかと思うことがあるが、まぁそれも別にいいかと自己完結しているとＡＲＣＵＳに通信が入る。

「はいよ～…」

『ああ、クリアか？』

「おう、そうだが…なんか用か？」

『いや、実はこの前のオリエンテーションで使った旧校舎の調査依頼の手伝いをしているんだが……』

リィンが掛けてきた内容を簡潔にまとめると『自分たちだけでは不安だから、少しでも実力の高いクリアが着いて来てくれると心強い。だから少し力を貸してくれないだろうか』という事らしい。

『どうかな？　』

「んー…そうさなぁ……」

チラリと横目でフィーやトワたちを見るが、訝しげに首をかしげているだけだ。旧校舎の調査となると、戦闘は確実に避けられないだろう。今度ある実技テストに向けていい練習になるかもしれないが、クリアとしてはただ単純にめんどくさかったため

「や、わりぃわ。ちょい用事あるしさ」

『そうか……　いや、用事があるならしょうがないな』

「また、今度があったら誘ってくれ　」

『ああ、分かった』

通信が切れると、フィーが真っ先に

「誰？　」

と聞いてきた。クリアはふぅ…とため息を吐くと、めんどくさそうに

「リィンから　」

「なんて？　」

「旧校舎の調査依頼を受けたんだと。それで手伝ってくれないかって言われただけ……って、なんで俺フィーに説明してんだ？　」

　自分でも無自覚だったのか、説明したあとにそう気づいた。その様子に傍観していたトワとシオリも苦笑を隠しきれていなかった。フィーは説明されて当然といったような顔をしていたが。

「でも、その様子だと断ったみたいだね。……良かったの？　」

「ま、いいだろ。どうせ、行っても男しかいないむさ苦しいチームだろうからな。それなら、こっちで美少女たちとのんびりしていた方が得ってもんさ」

「あら、お上手ですね　」

「び、美少女……」

「……はぁ」

　クリアの発言に三者三様の受け取り方をする。シオリは軽く受け流し、トワは言われ慣れていないのか正面から受け止めて照れ、フィーは呆れたようにため息を吐いている。

「あらー…一人以外受けが良くないなー」

「残念ながら、いわれ慣れてるの」

「隣で言っているの聞き飽きた」

「ハハー…どうりで受けが良くないわけか」

一人は間に受けているようで、未だに照れていたがクリアにとって守備範囲外なのか放置している。……フィーからは冷たい目線を向けられはしたのだが。

◆

あれから、楽しく？　過ごしたクリアとフィーは第三学生寮へと戻ってきたのだが……

「ただ……酒臭ッ！」

「……っ！」

寮内に漂うアルコールの臭いに思わず二人して鼻を覆ってしまう。その発端である人物はというと、フロントに備えてあるソファーに座ってテーブルに突っ伏していた。その周りには幾つもの酒瓶が転がっている。

「フィー…アレ」

「了解…」

フィーにアレ…水を取りに行かせている間に、クリアはサラを揺すって起こそうとする。

「おい、サラさん…起きろって」

「う、うーん……あら？　クリ、ア？　……あー…気分悪い　水…」

「フィーに取りに行かせてるから、ほらちゃんと座れって　」

　テーブルに突っ伏していたサラを起こしてソファーの背もたれに体を預けるように体を起こさせる。その時に顔を見ることができるが、本当に気分悪そうにしており、変に刺激してしまえば淑女があまり出してはいけないようなものが口から出そうなので刺激しないようにしていた。

「ったく……　自分の飲める量くらい把握してんだろうに…」

「つい、ハメを外しちゃったのよぅ……」

「なんでんな事したんだか……」

「クリア、水持ってきたよ」

「おう。……ほら、水」

「ありがと……んく、んく」

　フィーが持ってきた水を飲んで先ほどの顔色よりもホンの少し良くなったようだが、未だに少しの刺激を与えてしまえば吐きそうなのは相変わらずである。

「はぁ……いやーちょっと飲み過ぎちゃったわね～」

「飲みすぎたって……ちょっと待て、サラさんの部屋の酒ってもう

ほとんど残ってなかったよな？　」

「……さぁ？　どうだったかしらねー」

「オイ！　まさか俺の部屋の奴取ったんじゃ…　」

そう言って、クリアはサラの肩を掴んで揺すった。

「あ…」

「……どうしたフィー…あ」

少し揺すっただけで吐きそうな顔色をしていたサラをクリアは揺すってしまったのだ。妙に静かなサラの顔を覗き込んでみると彼女の顔色は……見るのも無残なほど真っ青だった。

「うぷっ……も、無理」

「お、おい…ちょっと待て、後１０秒…いや、あと5秒でお手洗いまで……」

「ごめ、も、む……り」

「あ〝あ〝ぁぁぁぁぁぁッ!?　」

クリアの健闘むなしく間に合うことはなく、寮にはクリアの悲鳴と何かがビチャビチャと溢れる音が響いたそうだ（フィー談）

お知らせ

えーっと、長らく更新しないで突然なのですがこのたびこの作品『緋色の軌跡』を書き直そうと考えています。と言うのも、感想とかでの指摘で矛盾している点とか、自分としても少し書き直したい部分が出てきてしまいましたので、書き直そうと思っています。

その際に主人公の設定や今まで書いていた部分が大幅に変わるところがありますが、そこはご了承していただけると幸いです。

誠に勝手ながらではありますが、こちらの方は削除して新たに作ろうと思っています。

ホント、今まで書いていた時はプロットと設定が甘かったせいで少し矛盾したところなどが出てきたので修正版？ではそこらへんを重点的にしていきたいと思います。

……あっれー千文字ってかなり多いですねwまだ三百程度しかないですよwあと７００もどうしろと言うんでしょうかw

じゃあ、此処で変わってしまう緋色の軌跡（多分タイトルも心機一転すると思います）で書こうと思っていたプロットを少し。受けがよかったらもしかしたら修正版もどきで使うかもしれません。

・主人公を最終的に敵側に回す。（ある思惑を持ってリィン達Ⅶ組と対立）

この構想は早い段階から考えていたんですよね。ただ、そのきっかけとなるものを作るのが今作品の主人公の状態では少し難しかった

ので断念しましたが。それに敵側（解放軍か結社に所属させるか迷っていましたが）にすると発売が発表された閃の軌跡続編を書くのが少し難しくなるのでは、と思ったのも断念の理由の一つですね。

・ヒロイン

ヒロインは散々悩んだ結果どちらかというと書いているところではどっちもどっちの状態になってしまったままになりました。……それよりもユーシスのほうがヒロインぽくなっていた気がしますねwしかも驚いたのは、そのどちらかというとBでLな話になると圧倒的に閲覧数とお気に入り数が増えてしまうという素直に喜べない状況…そんなにソッチの話が好きなんでしょうかハーメルンの読者の方々は。いや、確かにそう言う作品少ないですよ？完全に無いと言えないのが、少し悲しい気がしますが。ですが、私は断固としてNL派なのであしからず。

というか、書き直す理由の一つでもあるんですけどね。書いてたら何故かホモっけがある作品になってしまっていたのでw　私としてはそんなつもりもなかったのですけどねwwww

取り敢えずこんな感じで勧めていこうと思っていたんです。ただ、じぶんが思っていた方向とは別の方向へと行きかけていたので書き直す決心をしたという次第です。

重ね重ねですが、よろしければ新しく書き直す作品の方にも目を通していただければと思います。では、良いお年を。来年もよろしくお願いしますm（__）m